

CHOISIR

1996. 6. 25



Vol.46

CHOISIR
Vol. 46 **CONTENTS**
June 1996

| | |
|--|----|
| 『CHOISIR』を閉刊させていただきます。 | 1 |
| LA VOIX de CHOISIR | 3 |
| ■特集■低容量ピル、どう思う？ | 4 |
| ●「やおい論争」● 「甘えてはいけない」という呪縛 T. N. | 10 |
| 結局なにを求めてきたんだらうか。 人それぞれだけど、とりあえず、私の場合。 田中博美 | 15 |
| このごろ考えていること M | 22 |

『CHOISIR』を閉刊させていただきます。

『CHOISIR』をご愛読いただき、誠にありがとうございます。

突然ですが、次号をもって『CHOISIR』を閉刊させていただきます。

理由は大きく二つあります。ひとつは、四月から仕事をめぐる個人的状況が変わって、『CHOISIR』に裂く時間が物理的に本当になくなってしまったことです。今号も発行がこんなに遅れてしまい、「どしたの？」葉書を読んだ読者の方が何人かいらつしゃいました。ご迷惑かけて、すみません。心配してくださって、ありがとうございます。発行を楽しみに待っていてくださる方がいることは、この六年間、『CHOISIR』を発行しつづけてきた私の最大の勇気だった。だけど、予測していた以上に、私の生活が変わってしまった、もうこれ以上は無理なです。本当にごめんなさい。

もうひとつの理由。以前からの読者の方はご存じのことと思いますが、私は昨年の夏、「ヘテロテイカ」という異性愛女性のためのネットワークを発足し、十二月には同名の会報を創刊しました。周囲の友人・知人から「似たようなこと二つもやっつてどうするの？」「すごいエネルギーだね」と言われておりましたが、やっぱりエネルギー切れしてしまいました。

私の中では、会報『ヘテロテイカ』と『CHOISIR』は別のものとして存在してきましたし、違うアプローチは可能だと思ってきたのですが、なにしろ先に述べたように、余力がないのです。となると、いまの私としては、「ヘテロテイカ」の活動のほうを続けたい。

「ヘテロテイカ」は異性愛であることに自覚的である／ありたい女性のためのネットワークと銘打っておりますが、異性愛を打ち出したのは、ある種、政治的な意味合いが大きいわけですし、同性愛がいつまでも「特殊な人々」の「趣味だか指向だか」と思われている現状に切り込むためのやり方なのです。ですから、基本的には、「ヘテロテイカ」は女性のジェンダー／セクシュアリティを考える場なのです。『CHOISIR』がかなりフェミニズム系という位置づけをキープしてきたのに比べたら、もう少し、守備範囲が広いような気が、私はしています。もちろんとポップで、多少エッチで、フットワークが軽い、という感じかな。

もともと、続けられる人ができる範囲で、無理をせずをやっつていこう、と始まった『CHOISIR』発行でし

た。いつでも止められる、義務になったらそれはおかしい、と思ってきました。そう言い続けてもきました。でも、実際に購読代をいただいて、読者が増えてくると、それも言っていられない面が出てきます。隔月刊としている以上、個人的な事情で発行が遅れば、読者の皆様にご心配・ご迷惑をかけるのは必至です。

また、ここまで続けてくると、いろいろな媒体で紹介されたり、取材を受けたり、ライターのお仕事までいただいてしまうというありがたいお話もあつたりで、「知る人ぞ知る」ではありますが、それなりの位置に『CHOISIR』はつきました。ますます、「いつ止めたって、あたしの勝手だよー」などととは言えなくなりました。

正直いって、いつも楽しいばかりじゃなかったし、フェミニズムの失速（マジで盛り上がった時なんて、あつたのか？とも言えますが）のなかで、何をどうしていくのかが見えなくなったり、自分自身のなかでの『CHOISIR』の位置づけも、不明瞭になったりもしました。それでも、これまで発行し続けてきて、本当によかったと思っています。

私個人のこの六年間の総まとめは、次の最終号にてじっくり述べさせていたきたいと思っています。

読者の皆様も、『CHOISIR』への思いを次号用にお寄せいただけるとありがたいです。来号は、それ以外には特に特集を設けません。「やおい論争」も終結させていただくこととなります。ぜひ、お声をお寄せください。ご批判も真摯に受けとめますし、暖かいお言葉も、もちろん歓迎です。

というわけなので、『CHOISIR』を今まで読んでくださった皆様には、ひきつづき『ヘテロティカ』でおつきあいいただけると、私としては大変嬉しいのです。『ヘテロティカ』の読者は、原則として女性のみとしておりますが（セクシュアリティは問いませんが）、『CHOISIR』の購読者である男性に限っては、購読者として歓迎させていただきます。

今後、読者の皆様にどうしていただくかとしては、いろいろなケースが考えられます。たとえば、①残っている購読料を返却する（今後のおつきあいはないことになってしまいます）、②残金を『ヘテロティカ』の購読料にあてていただく、③既に『ヘテロティカ』にはお振り込み済みいただいているので、更新料として残金をあてさせていただきます、④残金をカンパにあてさせていただきます（『ヘテロティカ』は要らない、ってことですね）、など。それについては、次号に、残りの購読料を明記し、今後どうするかマルをつけていただくための返信用の葉書を添付いたしますので、それにてお返事ください。

長いようで短いような——やっぱり長かったかな——おつきあい、どうもありがとうございました。

La VOIX de CHOISIR

■ T. N. ■

45号の特集の感想。

学校の「生理教育」に問題ありと見た。生理(初潮)のはじまる直前の小学校五、六年生で教えるんじゃないくて、もっと低学年、一年生とか幼稚園から毎年一回、授業を持つべきである。

男子も一緒に授業を受けさせる。

生理用品や生理の状態(二日目か辛いとか)をもっと詳しく教える。

でないとTVコマーシャル(二日目でも安心)から先に覚えちゃゆうぞ。

あのタモリでさえ、ナプキンのテープのついてあるほうを上にしてつけるものと四〇歳になるまで思っていたというではないか。

生理については男性にもっと知つていてもらうべきだと思う。

江川達也の『東京大学物語』というマンガで、女の子が入学式の前に生理になっちゃって困るシーンが描かれてるが、そこに描かれてるようにイキナリ「始まった」時にあんなに血が出る

ものか(尿が出るかのように流れている)。

そんでその女の子は「困った……」と言つて便器に座りこんでタバコ吸つてるんだけど、その子はもう大学生で、初潮が訪れてからもう何十回とナプキンのない状態で生理が始まることは経験しているはずで、今さら困つたりするか。

トイレットペーパーをぐるぐる巻きにしてあげれば良いだけなのに、その隣に入ってきた女の子彼女もナプキン持つてなくて、今生理が始まつちゃつた)が、ティッシュペーパーとレースの紙ナプキンとセロハンテープで「羽つきのナプキン」を作るのだ(作るかー!)

私は弟(十八歳)に、ここに描かれていることは大ウソであるとちゃんと教えてやったが、これを読んだ青少年が間違つた知識を持つてしまふのは困る。

こーいうものこそ女性団体は抗議すべきではないのか。

それから、生理用品を売つた時、紙袋に入れるのもやめろ。生理用品は恥ずかしいものでも

汚いものでもないぞ!

■ マーガレット ■

やおい論争は、正直言つて、疲れてしまひました。ところどころ興味深い箇所もあるのですが、ちゃんと読む気がしないのです。ざっと目を通すと「うっ」となつて、そのままです。すみません。苦勞して出してくださっているのに。どこがどう「うっ」なのか、それを突き止めるのもおつくうなほど。結局のところ、やおいに対する関心がそれほどないということなのでしょう。ようか。

やおい論争の本筋からははずれていますが、物事への精神分析的なアプローチというのは、ほんとにいい加減なものです。前エディプス説とか、かんとかなんで、なんとも言えるじやありませんか。べつに証明できるわけでもないし。

今後はやおい論争以外の記事に期待しています。

～特集～

低容量ピル、どう思う？

いよいよ年内に低容量ピルが認可されるのではないか、という情報があります。あなたがピルの使用についてどういうお考えをお持ちか、お聞かせください。

1 あなたは低容量ピルの認可に賛成ですか、反対ですか？

- ①賛成 ②反対 ③どちらとも言えない ④わからない
⑤その他（ ）

2 低容量ピルの使用について、あなたはどのように考えますか。あてはまるものにマルをしてください。(複数可)

- ①避妊方法の選択肢が増える。
②少なくなるとは言っても、副作用は心配。
③コンドーム等、(現場使用)のわずらわしさがなくなって便利。
④一日でも飲み忘れたら効力がないのだから、毎日がセックス中心に動くことになる。
⑤女性の性的自己決定権の確立につながる。
⑥男がますます避妊に消極的になる。＝避妊を言い出せない女の現状が悪化する。
⑦中絶件数の減少につながる。 ⑧性感染症が流行する。
⑨HIV感染率が上昇する。
⑩安価なものが水面化で販売されるようになる危険性が大きい。
⑪低年齢層の性モラルがますます乱れる。
⑫その他（ ）

3 その他に、ピルおよび現在日本で行われている避妊法について、ご意見がございましたら、ご自由にお書きください。

● 出口真紀子 ●

3 2 1
 ⑤ ①
 日本は中絶天国だと、よく聞く。しかも中絶をしている人の多くは、二〇代〜三〇代の主婦だという。結局、夫にコンドームをつけてと言えない、または、夫がつけたがらない、つけるのを拒否することにノーと言えない女性が、自分のからだを中絶によって傷つけないためには、ピルが「解決策」だとは決して思わないが、ひとつの確実な手段と思える。

● 朝倉ふみ ●

3 2 1
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑧ ⑨
 (低容量ピルが認可されたら) 男の無神経、無責任を助長する。設問2で③にマルをしたのは、意外かもしれないが、現場使用(一)のわずらわしさがイヤな私は、今はベツサリーを使用。低容量と言えども、生理に逆らうことは事実なんだから、おすすりません。いつsexするかわからない同居人もいないから、私はやっぱりベツサリー。

● 新勝太郎 ●

3 2 1
 ① ② ④ ⑧
 ナイよりマシ、しかしね……。コンドームについては、「つけて欲しい」と言えない女や、「つけたくねー」とか言う野郎に、他人との性愛の快楽を享受するシカクなしじゃん、と思ってる。しかし、避妊とSTDプロテクションのためのもっと良い方法、ないもんつかね? 禁欲? ↑反動がコワイっすよ。

あ! 先日参加した「Transgenderの会合の席上でも(ホルモン・セラピーの話から脱線して)話題になってた「テストステロン」投与で精子の生産を阻害する男性用の「避妊薬」研究中だというのが……、副作用が気になるし、プロテクションに対する男性側の意識が低すぎる状況でこんなモン解禁したら、問2の⑧みたいな事態になるのでは……。

● 逃亡者A ●

3 2 1
 ② ⑧ ⑨
 コンドームがいちばん良いのではないか、と思います。

● Masatoshi ●

3 2 1
 ① ② ⑦ ⑩
 HIV感染予防などでもそうだが、少しコンドームを過信しすぎていないだろうか。リスクあつてのセックス、そこに快があるを見てしまう自分自身に病的なものを感じるが、完全に安全たるセックス管理の中にあるセックスというのもイメージできない。でも、妊娠の場合、結局苦しむのは女性であるのだから、リスクをとるかセーフをとるか、今よりもっと女性の選択に任せべきだと思う。それから薬関係は、副作用などより、もっと情報がオープンにならないければならない。

● 山内啓位子 ●

3 2 1
 ① ⑤ ⑦
 避妊法ではありませんが、ピル反対意見の一つの「コンドーム使用率が減って、エイズが増える」という意見は許せません。エイズと避妊はまったく別の問題なので、ピルは解禁したうえで(避妊のため)、エイズ教育としてコンドーム使用を呼びかけるのが筋だと思っています。

●小川みほ●

- 1 ①
2 ②⑤
3 私はレズピアンで、これからもレズピアンとして生きていくつもりであり、しかも自分で子を産む気はぜんぜんないため、避妊というものに関しては「他人事」という気持ちが強いのですが、今回のピルのアンケートは、とりあえず選択肢が増えるのは良いことだと思いい、このような回答になりました。もちろん、低容量ピルにしても副作用がまったくなくなるわけじゃないから、認可されたら使用するかどうか考えている女性にとつては、不安な気持ちは消えないでしょうけれど、そういった若干のマイナス面も含めて、個々の女性がそれぞれ選択されればよいと思います。

●藤原諒子●

- 1 ③
2 ②⑥⑪
3 低容量ピルの認可に伴い、「性」への問い直しが必要となると思います。認可されようがされまいが、女性の負担（薬をのむことから副作用まで）は変わらないように思います。

●笹倉尚子●

- 1 ①
2 ①②
3 ピルを飲む避妊については、女のからだに關する自己決定をどのように獲得していくか、という文脈で考えなければならぬと思います。リップログクティブ・ライツおよびセクシャル・ライツを「ふつう」の人たちにわかりやすく普及する努力が求められているのではないのでしょうか。

●T. N.●

- 1 ④
2 ②⑨
3 避妊法の絶対確実で安全な方法は、やはり唯一「sexしないこと」だと思います。飛行機事故に絶対遭わないためには、飛行機には乗らないように。飛行機に乗る時は、やはり皆、もし落ちても文句は言わないぐらゐの覚悟をして死ぬ気で乗るべきだと思います。避妊もいつしよ。
- ピルはいくら解禁されようとも、私個人は薬物エネルギーが多いので、使うことはないでしょう。ピルっていうのは、体を妊娠した状態にしてしまうので、どうしても太っちゃうそうだし、ホルモンのバランスが心配。

ただ選択肢が増えるという点では、解決しても別によいと思います。でも日本では、避妊は男の仕事（コンドーム）ということにしときたいなあ。

●D. K. P.●

- 1 ④
2 ①②④⑤⑥
3 えーと……自分が避妊を必要としないセックスしかしたことないので、詳しいコトは言えないんですが……（レズなもんで、というか、男としたことなので……）。避妊の研究してる女の人はいないのか少ないんだろーな、とはよく思います。ピルもそうですが、IUD（だっけ？ 子宮に入れるヤツ）にしる、すごく女の体にワルソーなものが多いじゃないですか？ 乳腺の纖維腫でちのレントゲンとつた時思いました。が、医学つて、女（に限ったコトじゃないと思います）の体とか心に気づかないなすぎです。治療すりゃいいと思ってる。近ごろは治療つてコトも考えてないみたいだし……。

●小椋杏子●

- 1 ①
2 ①②④⑥⑩

ピルにはまった私

出口真紀子

セックスするようになってから、私はずっとコンドームのお世話になってきたのですが、七ヶ月前から低容量ピルを服用し始めました。なぜピルを服用するようになったかという、アメリカに住んでいるので手に入れることが簡単ということもあるのだけど、コンドームの素材レイテックスに過敏に反応するようになり、性交に痛みが伴うようになったのが最大の理由。いろいろオルターナティブ避妊方法を調べてみて、ピルにはかなり抵抗があったのだけれど(女性の身体を薬品でコントロールするのは不自然=身体にとってよくない、なぜ女性が自分の身体によくないことで避妊の責任を負わなくてはならないのか、など)、とりあえず「短期間」を条件に踏み切ったのです。もちろん、ステディなパートナーがいるので性病の感染の心配がない点も重要なポイントでした。

心配していた副作用ですが、最初の一ヶ月間だけ、数日おきくらいに少量(下着にシミ程度)の出血があった以外は、何もありませんでした。よく言われる吐き気、めまい、などは、私の場合、一切なかったように思う。

また、からだに関する変化といえば、臍に常にしっとり感があるということ(今までとは明らかに違う!)。体重は、今のところ特に変わっていません。

ピルにして良かったことは、今まで生理が六日だったのが二日になり、排卵がないので生理痛がないこと。こんなに喜んでいいのかと思うくらい、これは実に快適。これではなかなか辞めれないかと真剣に悩みます。しかも量がかなり少ないので、ナプキンがぜんぜん減らない。あと、たとえば、日曜日からピルを飲み始めると週末に生理が重ならないので、ウィークエンドには思いっきりアウトドア・スポーツなどをエンジョイできるというメリットもある。ちなみに私の場合、一ヶ月分のピルの価格は二七ドル(約2700円)くらいです。また、コンドームがあるとないとは、実際、気持ちよさが違う(これは男側だけでは決してない)。

ピルについて悪いところというのは、やっぱり飲み忘れると不安になること。一日忘れた場合には翌日ピルを二つ飲めばいいのだけど、二日忘れた場合とか、ちょっと心配。そういう場合はコンドームを一定の期間、併用しなくてはなりません。あと、これは私の問題ですが、今まできちんとコンドームにおさまってくれていた精液が、今度は臍から外へどろどろと流れる感覚は、はっきりいって未だに慣れないところがあります(潔癖なのかなあ、なんか気持ち悪いの)。とにかく、ことが終わると風呂にまっしぐらです。

産婦人科医(「男性・女性・どちらでも」の選択があるので、私は女性を指定している)の話だと、もともと女性のからだというのは十五歳くらいで最初の子供を産み、母乳が出る。そして妊娠・母乳の出る間は排卵がなく、また何度も出産を繰り返すので、排卵のない「休みの期間」がかなり長期間あるように設計されているとか。ところが、現代の女性は初出産が三十代と遅くなっていたり、出産しない女性が増えているので、ピルの服用で排卵の「休息期間」を与えることは、逆に「自然に近づいている」のだという。そう言われるとそうかな、など思ったりしますが、アメリカではとにかく、ピルの利点として、卵巣癌や子宮癌のリスクを少なくする意味でも、医者の方は肯定的に位置付けています。

日本の場合にはそう簡単にピルが受け入れられるとは思いませんが、私のように実際に使ってみてラクだ!と思って、はまるパターンは確実に増える気がします。皆さんのアンケート結果が楽しみです。

3 これなら絶対に確実！ というものがない
 のだから、できるかぎり選択肢を増やすの
 は当然というか、パクセンとだけど、「もつ
 と自由化すべきだ」「規制緩和しろ」とか思
 います。ただ、選択肢が増えるということ
 は、選択する自分自身の責任も重くなるの
 だし、ある意味でリスクも増えるのだから、
 そのへん手放してワイワイというふう
 にはなりませんね。

● マーガレット ●

1 ①
 2 ①③⑤⑦
 3 未だに射精直前に抜くなどというのを避妊
 と考えている女性がいるのが信じられない。
 望まない妊娠を避けるためには、できるだ
 け多くの選択肢があるほうがよい。ピルの
 せいで男に「コンドームをつけて」と言い
 出せない女性が増えるからピルに反対する、
 なんて本末転倒だと思ふ。そういう女性を
 情けないとは思ふが、人にはいろんな事情
 があるのだから。

● 富岡明美 ●

1 ①
 2 ①②③④⑤⑥
 3 女性の身体への副作用がいちばん気になり

ます。男性の身体をいじくつたら！と思う
 時もあります……（パイプカットなんて
 副作用もないし、性欲が失われることもな
 いし）。でも、それって、犠牲者を女から男
 へ移行したにすぎないし。女も男も身体・
 健康をそこなわない避妊は、やはりコンド
 ームしかないのでしょうか。コンドームは
 好きじゃありませんけど。

● LAM ●

1 ①
 2 ①②⑥
 3 ピルと性感染症を同一線上で議論するのは
 おかしい。
 男用のピルは、なぜないのか。でも、か
 えって無責任なヤツが増えるだけか？

● Poco rit ●

1 ①
 2 ①③⑤⑦⑩（とにかくくみにも♀にも便利だ。）
 3 sexしたことがないから、わからない
 （本当だつてば）。しかし、ピルが認可され
 れば、ゴムと併用すればかなりの中絶が防
 げられるのではないか？ 「中絶」に比べれば、
 副作用や、毎日飲むわずらわしさは、とつ
 てかわるんじゃないかと思ひます。（しかし、
 「低容量」ってというのが気にかかるなあ――

本当に効くんדרらうな？

● 井元哲也 ●

1 ①
 2 ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨
 3 「ピルの認可」は賛成とか反対とかいう問
 題なのだろうか？ たしかに「薬」という
 ものは危険なものなので、その安全性のチ
 エックは必要だろうけど、それは時にピル
 に限る話ではないし、また、安全性以外の
 判断基準が入ってくるすれば、大いに問
 題だと思ひます。

● 田中博美 ●

1 ①
 2 ①②⑥⑧⑨
 3 現在日本で行なわれてはいないんだけど、
 先日TVで男の人にクスリを注射するだけ
 で避妊できるというのをやってみました。
 いつもそのクスリを服用していれば、99パ
 ーセント大丈夫だというのだけど、その2
 パーセントがコワイなあと思ひます。

低容量ピル さらりと基礎知識

月経開始から次の月経開始までの間は、平均28日間で、その中間の14日目に排卵が起きる。月経終了から排卵までの期間を卵包期、排卵後から月経開始までを黄体期、と呼ぶ。

卵巣からは2種類ホルモンが分泌されている。ひとつは卵包ホルモン（エストロゲン）で、月経の終る頃から分泌されるもの。卵巣には卵がたくさんあり、一つ一つの卵は卵包という袋に包まれている。卵包はもともととても小さい袋で、卵包期に間に数個の卵包が発育し、そのなかの一つが選ばれてさらに大きくなる。卵包ホルモンは、この卵包から分泌されるもの。

そして、このホルモンが十分に分泌された時に（卵包の直径は2センチくらいになっている）、卵包が破れて卵が飛び出す（これが排卵）。排卵の起きた場所には黄体と呼ばれる物質ができて、ここから卵包ホルモンを分泌するほか、もうひとつのホルモンである黄体ホルモン（プロゲステロン）が分泌される。つまり、黄体ホルモンは、排卵の起きない場合は分泌されない。

ヒトの頭の中には間脳（視床下部ともいわれる）があって、ここが性周期の中核となっている。この間脳からゴナドトロピン放出ホルモン（GnRH）というホルモンが分泌され、下垂体に働き、ここから性腺刺激ホルモン（ゴナドトロピン）が分泌されて、卵巣の機能を調節している。性腺刺激ホルモンの働きで、卵巣から排卵したり、卵包ホルモンや黄体ホルモンが分泌されて、子宮に作用し、月経を引き起こすのである。

逆に、卵包ホルモンと黄体ホルモンは血液にのって間脳や下垂体まで流れ、卵巣から十分にこれらのホルモンが分泌されているのかどうかの情報を流している。つまり、血液中の卵巣ホルモンの濃度によって、ゴナドトロピン放出ホルモンや性腺刺激ホルモンの分泌が調節されているのである。これをフィードバック機構という。

ホルモン剤である経口避妊薬（ピル）は、1錠のなかに、卵包ホルモンと黄体ホルモンが含まれている。ピルは原則として、月経開始5日目から1日1錠、21日間飲み、7日間飲むのを中止して、また21日間飲む、という飲み方をする。

ピルを飲むと、胃を通り、小腸で吸収されて、血液中に2種類ホルモンが入り、身体を循環する。そして、血液中に十分な濃度の卵巣ホルモンがあるかのように、間脳・下垂体がごまかされてしまうのだ。つまり、ピルは先のフィードバック機構を応用して開発された薬。

既に十分に卵巣がホルモンを出していると思い込んだ間脳・下垂体は、卵巣を刺激する必要がないと判断して、ゴナドトロピン放出ホルモンや性腺刺激ホルモンの分泌を低下させる。その結果、卵巣からの排卵を抑制し、卵巣からのホルモンの分泌も抑制する。

ほかに、ピルによって体内に吸収されるホルモンは、正常の性周期に卵巣から分泌されるホルモンの量よりもはるかに少ないため、子宮内膜が厚くならないので、**着床が抑制される**。また、月経周期のはじめから、卵巣ホルモンだけでなく黄体ホルモンも同時に存在するわけだから、子宮の出口の粘液が固くなり、**精子の進入を抑制する**。以上で避妊できるという仕組み。

エストロゲンが50mcg未満のものが低容量ピル、50mcg以上のものが中容量ピル、50mcgより多いものが高容量ピル、と呼ばれている。排卵抑制効果は、低容量ピルの場合、中・高ピルよりはやや落ちるが、避妊効果としては同じとのこと。副作用は、中・高容量ピルに比べて軽いが、子宮内出血、悪心・嘔吐、乳房痛、体重増加、血性症・高血圧、心臓疾患、乳ガン性などは、まったくないわけではない。副作用としては、月経硬困難症の緩和、ニキビや多毛症の抑制、卵巣ガンの予防、また中高年女性の性周期の乱れの緩和、骨からのカルシウム脱の予防、などがいわれている。

YAOI
RON-
SOIT

「甘えてはいけない」 という呪縛

T. N.

YAOI
RON-
SOIT

拝啓

CHOISIR 45号、どうもありがとうございました。

開けてびっくり、前回の私の投書がずいぶん幅をきかせていて、自分で驚くやら恐縮するやら……。投書した後は、かなり感情的な文章だったかも……と後悔する気持ちもあつたのですが、こうして活字になったものを見ると、なんだか賢そうに見えるではないですか。

ふだん、ちゃんとした文章を書く習慣のない私のような人間にとって、「投稿」という行為は、ものすごく腰の引けてしまうものなのです。が、実際、それがこんなに気持ちの良いものだと知りませんでした。栗原さんにわずかも反応していただけたことが、自分でも思いもかけず舞い上がってしまうほどに嬉しかったり……。あー、本当に投

稿して良かったと思えました。

ワープロに起こすという作業、アンケートの集計と併せて大変なことでしたですが、どうもありがとうございました。

以前、私の所属するミステリサークルで、ある方が「御手洗シリーズ」のやおいはやめてほしい……と書いてらしたのを受けて、同サークルの会誌上で私、「やおい論争」を始めようとしたことがありました。

結局、そのサークル内に、実際に御手洗のやおいをやっている方がいらつしやらかなかったのか（そんなはずはないのだが）、「私、やおいやってます」という方からの反応はゼロで、はじめに発言した方と同

じく、「御手洗シリーズが大好きだから、やおいになってほしいでくさい」というまともな方の意見が大半を占め、唯一（私に対して）、「あなたはやおいを解っていない。やおいは立派なムーブメントです」という、やおい擁護派でありながら御自身はやおいの趣味はないという方からの反論しかなく、論争になりませんでした。

もともと会員のほとんどが顔見知りという小さなサークルでしたので、やりにくいということもあつたのですが……。

ですから、それを思うと、耽美雑誌のお便りコーナーでも商業的に都台の悪い意見はにぎりつぶされてしまうし、「やおい少女」の立場から発言できるCHOISIRは、とてもとても貴重な場で、決して失いたくないのです。どうか、これからもやおい論争を続けてください。

それから、栗原さんに言われて初めて気づいたのですが、私つてやおいのマジョリテイだったのか！ だつて、やおいをやめたがるくらいだから、つつきり少数派だと思つた。

実は私、先ほどのミステリサークルでのやおい論争で、「御手洗潔との対等な関係を得るはずのやおいで、石岡和己が食事つくつてるのはなぜ？」と質問したことがあるんですもの。その答えのカードを自分が持つてたなんて、言われるまで全然気づかなかつた。……いやー、言つてみなぎやわからないもんだ。

やおいが好きなのと同時にフツの女の子になりたいと思うことつて、あたりまえだと思つてました。やおいの5%の栗原さんがそう思わないんだつたら、やつぱり私はマジョリテイです。

それが世代の問題だとは知らなかつたけれど、「シンデレラ物語に憧れること」が許されてなかつた。というのは大正解です。私、これもありませぬことだと思つてた……。

言い換えれば、「甘えてはいけない」という考えが、ものすごく強く私を支配しているのです。

四、五年前に読んだあるやおい小説（パロディもの）に、こんな部分がありました。

主人公の男性は、少年時代、生まれた時からずっと母親にうとまれて育ちました。それでグレるということはなかつたのですが、容易に他人に心を開くことはなくなりました。

そんな彼にも唯一、優しくしてくれる叔父さんがいて、これはそんな彼の少年時代を描いたサイドストーリーなのですが、彼はある日、母親とケンカをして家を飛び出し、雨の中、その叔父さんの家に来て来ます。ところがそのとき、叔父さんの家には彼のいとこが来ていて、家の中では、そのいとこの少年と叔父さんが楽しそうに笑つています。それを見た彼は、その団欒を邪魔してはいけなないと、叔父さんが気づくまで、雨の中、家の外ですつと立っています。叔父さんが慌ててびしょ濡れの彼を家の中に入れ、体をふいて暖めてやりながら、母親とのことを察して、「そんなに家にいるのが辛いのなら、いつでも私のところに来ればいいんだよ。君は甘えても良いんだよ」と言いまします。それに対して彼は「まだだめだよ。まだ……」と答えるのです。

この部分に私は強く感動して、他のストーリーは忘れても、ここだけは未だに覚えていてのですが、その後、彼は永遠のパートナーとなる男性と出会い、無理矢理に犯されて二人は幸せに暮らすのですが（こう書くすとすげーな）、これはサイドストーリーですので、これを読んでいる私はその先、彼が幸せになれることを知っているわけで、それが「辛い思いをしてきたのね、でも大丈夫よ。あなたは幸せになれるのよ」と、よりいつそうの感動を深められたわけですよ。

ここでのポイントは、叔父さんの言う「甘えても良いんだよ」という言葉と、彼の「まだだめだよ」という答えです。

やおい少女でない方には、なぜ彼が「まだだめだ」と答えるのか、理解できないのではないのでしょうか。彼が「だめだ」と言っているのは、母親を捨てて叔父さんの家に来ることはできない（母親を捨てられない）と言っているのではないのです（実際、その後に家を出て、叔父さんの下で暮らすようになり、母親とも和解します。が、なんとその直後に彼は事故でその叔父さんと母親も亡くしてしまうのです。ガン！でも大丈夫、さっき言ったように、彼には永遠のパートナーが♥……。彼が「だめだ」というのは、「甘えること」に対してなのです。

これを読む時、私は叔父さんに「甘えても良いんだよ」と言っても、それに対して快感を覚えますが、その次に彼がそれに対して「だめだよ」と答えることに、それ以上の快感を感じるのです。

これが、中島梓のいう「やおい少女には長女が多い」（私も長女です。もちろん長女でないやおい少女も知ってるけど……あ、ちなみに右記の小説を書いた人は長女ではありません）せいか、ジェネレーションギャップのせいかわかりませんが、私が「甘えてはいけない」という考えを持っていることは本当です。

そう言うと、やおい少女でない方には以外に思われるかもしれませんが、やおい少女たちは、こんなに甘ったれていてはいないか、と。

では、たとえばオウム信者の人たちはどうでしょうか。私でさえ、彼らに対して、「なんだこいつら、こんなに甘ったれやがって」と思います。でも彼らは厳しい修行をしている自分たちが甘ったれていてなど夢にも思っていないでしょう。ましてや、何の努力もしていない私たち外の一般人にそんなこと言われるなどは心外中の心外でしょう。

やおい少女たちも同じです。彼女たちはこんなに同人誌活動で忙し

く、青春をオーカしている自分たちが、なぜ何の感動もなく生きていく一般の人に、甘ったれてるなどと言われなければならないのか、と思います。

それと同時に、何の抵抗もなく男性に甘えられるフツの女の子に対して、「いやあねえ、ぶりっこしちゃって」と思いつつも、なぜそんなに何の抵抗もなく甘えられるのかと思ひ、そうできない自分をもつてして、フツの女の子に引け目を感じてしまうのです。

「それは私の眼から見て彼らが甘えていないと思ったからではなく、甘えているにはちがいないがただ甘えているとだけ評するにはもった複雑な事態がそこで起っているように思えたからである」

ジャーナ！ この文は何かというと、私が「キーワードは、甘えだ！」と思いついて、タイトルだけは知っていたけどこのたび初めて手に取った、土居健郎著『甘えの構造』（初版は昭和四十六年発行）の第一章にてでくる文で、ここでいわれている「彼ら」とは全学連運動の学生たちのことです。

私がついているのは、初版から十年後に発行された第二版で、その二版用のまえがきで土居氏自ら、十年前にこの本を書いた時は、これが十年間も売れ続けるとは思わなかったと驚いています。が、なんの、それからさらに十数年経つた今でも、十分に通用する内容です。

なかには面白いことに「同性愛的感情」という項目もあるので、谷川たまゑさんも、いつべん臨床心理学から離れて、この本を参考にされてみては？

で、私はずっと「甘えてはいけない」と思ってたんです。それで「やおい」が好きなことも、やっぱり「甘え」だよな……と考えて、栗原知代さんが「自分の中のやおいをバーナーで焼きつくした」というのを聞いて、私はまだまだ甘いんだ、もっと甘えを徹底的になくさなくては……と思つたんです。

私たちには「甘え」という響きは、マイナスの言葉に聞こえますが、土居健郎氏は『甘えの構造』の中で、「甘え」を必ずしもマイナスの言葉としてのみとらえているのではないですね。これが私には意外でした。

私がこの本を知ったのは中学生の頃、私の中学生時代というのは「荒れる中学」と呼ばれ、校内暴力華やかに頃だったのですが、それら不良少女少女の真理を理解するために最適の書として紹介されていたものでした。

ですから、タイトルからして、「甘えてはいけない」ということを知っている私を、さらにまだ甘えているとして追いつめる内容のものだと思ひ込んでいたのです。

もひとつ同書から。

「彼らはまさに甘えられないから被害者なのがあるが、それでいて被害者としての立場に甘えているといえる」

「彼ら」とはやっぱり全学連のことなのですが、「傷ついたり子供」であるやおい少女たちにもびつたりだと思いません？

私が自分で「甘えてはいけない」とずっと思ってきたことに気づいたのは、つい最近のことなのです。はじめに書きましたように、私にとって「甘えてはいけない」ことはあたりまえのことで、わざわざ言葉にして認識することではなかったのです。

で、なんでじゃあ「甘え」という言葉を思いついたかというところ、ある日私の通っているある教室の若い男の先生（私より年下）に、私はその先生に教わってもう二年くらいになるのですが、その先生のことは好きな先生なのですけど、やはり先生ということ、あんまり慣れ慣れしきしきいけないなあと思ってたわけですね。

ところが、その教室も年度末ということで、かなりくだけた雰囲気になった日があって、私はその先生に対して「ねえねえ♥」と、ちょ

っと甘えてみたのです。

するとどうでしょう、先生はすごく嬉しそうになって、それまでの空気が私にとつては劇的に変化したのです。そのとき私は初めて「あ、なーんだ、甘えるのなんて簡単じゃん」と思ったのです。

これが以前、栗原さんが書いてらした、栗原さんと、栗原さんが訳したハードゲイポルノを読んで「私も夫にフェラチオするのが好きなんです」とお便りをよこした読者の方は、男の人はフェラチオされても驚かないことを知ってるけど、野村史子さんはそうすると男の人はびつくりすると思ってる、ということか！、と思いました。

中島梓は「コミュニケーション不全症候群」なんて言葉を考え出したけれど、やおい少女たちは単に「甘えベタ」というか甘え方を知らないだけなんじゃないかしら。

それはもちろん「甘えてはいけない」という考えが、基本的にあるからなんだけど。甘え方を知らないから、仲良くなったやおい仲間をすぐ「崇拜」するまでにいつちやつたり、「反対に、友達とはいえ、どっかよそよそしかったりとかしちゃうんじゃないかな。

だから45号の山内啓位子さんは、「やおいは私にとつてはシンデレラ願望で」というところを「甘え願望」に置き換えてみて、それから「最近つくづく思うことは、私は怠惰だったのだ、ということ。愛する努力も愛される努力も、友人をつくる努力も、高すぎる根拠のないプライドに根拠を与えるための努力もせずに、私は安易にそれらを満たしてくれる、やおいという夢にすがりついている……。『自分』から逃げ出しているはどうしようもないですね」とか言わないで。やおい少女はただでさえ、「頑張り屋さん」なのだから、つい「やおい」をやめるためにも「努力」してしまいますが、やおい少女式の努力では、ちががあかんのではないかなあ。

あとね、「なぜこんなにも『愛される』ことを求めるのを考えないままに」の「愛される」を「甘える」に換えてみると、なぜそれを求めてしまうのかというと、それは「甘えてはいけない」と思ってしまったているから、ということになりませんか？

やおい少女における「ただ甘えていると評するにはもっと複雑な事態」とは、やおい少女も「シンデレラ願望」^{コンプレクス}を持つているが、さらにその「シンデレラ願望」を持つのはいけないのだという「シンデレラコンプレクス」コンプレクスともいうべきものがあるが、これが男性との「対等な関係への渴望」とつながるのだけど、やっぱりはじめにある「シンデレラ課願望」がやおい作品には表れる、ということかなあ？ なんかよくわかんなくなってきたぞ。

やおいを生む元となった「シンデレラコンプレクス」コンプレクスが、かえってやおい作品に「シンデレラ願望」を生ぜしめているといたほうがいいかな。

45号で栗原さんに指摘されてハツとしたのですが、この「シンデレラ願望」コンプレクス「甘えてはいけない」がなかったら、私はどんなにか楽だったことでしょう。

私は自分が「フツの女の子」でないことが辛くて、それで「やおい少女」になった。

「やおい少女」になって、楽になったことはなかったんだけど、やっぱり「フツの女の子」でないことに変わりはなく、「フツの女の子でないこと」がカッコ良かった時代も終わってしまった、今度は「や

おい少女であること」が辛くなってきた。

その辛さから楽になるためには、もう「フツの女の子」になるしかない、と思っただけだ（だから「やおい少女」たちは「フツの女の子」のふりをしようとする、私のように女装してみたいになっちゃうたり、ピンクハウスしか着て過剰に「女の子」になっちゃうんだな。そのふりをしないと、ダサイ「おたくルック」になっちゃうし）、この「シンデレラ願望」コンプレクスが邪魔をして、それもまた辛いよ。

「フツの女の子」になるためでもなく、「やおい少女」のままでもいるにしても、「シンデレラ願望」にコンプレクスを感じないでいたら、どんなにどんなに楽なことだろうとヒックリしました。

私がフツの女の子をバカにしていたのは、彼女たちが「シンデレラ願望」を持ってたからなんだけど、私が「シンデレラ願望」を持ってなかったから彼女たちをバカにできていた、のではなくて、私は私の「シンデレラ願望」コンプレクスゆえに、彼女たちをバカにし、同時に彼女たちに、彼女たちは「シンデレラ願望」コンプレクスを持っていないからこそ憧れていたのね。なるほど……。

なんだか同じことの繰り返しばかり書いてるようになってきたので、このへんで終わります。

次号はまた谷川たまるさんの文が載っているといいな、と思います。期待してお待ち申し上げております。

どうかごきげんよう。身体に気をつけて頑張ってください。

結局なにを求めてきたんだらうか。 人それぞれだけど、とりあえず、私の場合。

田中博美

耽美小説にはまり、その意味を長年考えてきましたが、CHOISIRを読み始めて、また違う角度から考えることができ嬉しいです。

ひとりひとりとてもよく考えているし、私は物事をかたまりで見ている、耽美ならそのどこにひかれるのか因数分解して考えたりしない。自分の求める要素がちょうどよくキットになったものが耽美だったんだなあ、とか思っていました。

たとえばお好み焼きが好きだとして、小麦粉が好きなのか、具が好きなのか、ソースが好きなのか、考えてもせんない。さっくり混ぜ合わせて焼いた熱々のそれが好きなのであって、耽美も私にとってはそういうものだったから。でも耽美を分解して考えている文章から、いろいろ考えることができました。

秋里和国批判はとても納得できました。私も昔は好きだったけれど、今はなあ。

江國織の『きらきらひかる』は、それぞれの心理に共感できたけれど、もし私が男だったら、恋人の妻になんか近寄らないし、ましてや女に赤いリボンかけられて、その恋人にプレゼントされたりしない。たとえ、それが三人で共に受け入れ合って生きていくための儀式だとしても、というより、だとしたらなおさら。

あと、統計とかから分析するより、個人の体験（物語）を通して語られることが多いのがいいです。私は数字に弱いので、数字で語られるともうだめなんです。それと、私はマイノリティなので、統計になると「その他数パーセント」になってしまい、大きな数字に入るものの分析としてあらわれず、疎外感を感じるし、自分にまったく関係ないことはどうでもいいから。

そうそう、栗原さんの栗本薫さんに対するお話は、今までわからなかったことがぱーつと見えた気がしました。

私は栗本薫さんの作品にずいぶん助けられ、励まされ、笑わせてもらってきました。自分の中にある性衝動や愛情への欲求を晴らしたり満たしたりするファンタジーとしては最高でした。それから私は長い間悲しみや切なさを感じることができなかつたのですが——それはそういう感情が自分にとって耐えられない、危険なものだったからだと思います——彼女の作品の中の人々のそうした感情を味わうことで、外に出ず自分の中にたまっていくばかりだったそれらを完全に解放できたのでした。

でも、同時に、彼女の物語は私を苦しくもさせるのでした。それは多分に、彼女が女とは男に対してこうあるものだとししている姿から自分が遠く隔たった落ちこぼれだったからです。そんな女は愛されるわけもないの

だという思いがひたひたと打ちよせてくるのでした。

昨年、JUNEの文学ガイドに林真理子の『白蓮れんれん』の書評を投稿したとき、藤本優子さんが「読みながら私が感じた息苦しさは、小説のテーマとは別個に文章ににじむ、作者自身のどこか窮屈な結婚観からきているようです。この本だけ読むと、現時点での林真理子は『独身で好きなことばかりやってる女は半人前』だと優越感(と劣等感)をのぞかせつつネチネチ言う主婦作家の典型にしか思えない」とコメントしていたのですが、私はそうした主婦作家として橋田寿賀子がつい浮かび、つづけて栗本薫さんが浮かんできました。

彼女には、「父の娘」的なところがあると思います。存在でしょうが、「父の娘」というのは、男が女に対して「こうあるべきである」と望みそうなることについて、女が他の女を監視し、あーだこーだ言う人のことです。でも、彼女は自分の中の「父の娘」に痛めつけられてもいたのだと思います。そしてその自らの中の「父の娘」とときに戦い、ときに手を携え、多くの女性たちの力になる作品群を生み出してきたのではないのでしょうか。

だから副作用ぐらいは仕方ないかと思ったりもしてきましたけど、「副作用はいらない」と言う手もあったのだな。

さて、今回、T. N. さんの手紙を読んで、どうして私はCHOISIRを読んでみたいと思ったのか考えたのですが、はじめ思い出せませんでした。

私もJUNEの栗原さんの文章を読んで、CHOISIRを読みたいと思つたのですが、やおいをやめたいからではなかった。だって私はもう耽美小説を卒業していたから。JUNEは買っているけど、栗原さんの「とろろ日記」と文学ガイドしか読んでいないんです。秋月こおさんと尾鯨あさみさんは好きなので、ヒマができれば読むうと思つているのですが、

それも読めずに一年が過ぎたところですよ。で、私はまた耽美世界に戻ってしまうのはぜんぜん怖くないし、べつにかまわないんです。過去に一度必要なくなつて、また激しく浸つて、今度こそ完全に必要なくなつたから、もうリバウンドはないと思うけど。

高校の頃、山崎朋子の『あめゆきさんの歌』という本を読みました。平塚らいてうの時代のノンフィクションなのですが、当時貧しい女の子たちにアメリカにお嫁に行きませんかという企画があつて、主人公の女の子は貧乏な自分の家を助けたい思いで、十六歳でそれに応募します。でも花嫁募集というのは嘘で、彼女はシアトルの娼館に売り飛ばされるのです。當時はそうした被害にあつた女性が少なくありませんでした。

来る日も来る日も、彼女はそまつな仕切りがあるだけの部屋で売春をさせられるのですが、白人オンリーの娼館だつたはずの彼女がどうしたはずみだつたのか、日本人の男性と知り合い、足ぬけます。そして今度は自分がそうした女性を助ける仕事にかかわっていくのですが、売春しかできないからいけないのだと洋裁を教えようとしても、いったんそうした仕事について女の子たちのなかには、向上心を失い、ミシンをそこから盗んで逃げ、元の仕事に戻るような人たちもいて、彼女はがっかりします。

彼女はフェミニズムを学びはじめ、やがて日本に帰国します。そして後にはシアトルにまで行つて講演をしたりします。そのとき、彼女が娼婦だつたことを知る人々が「そんな奴が何をしにきた」と会場で罵声をあげるのだけれど、彼女は彼らが静まるまで沈黙し、やがて語りだしたのです。そのシーンが印象的でした。

それから何より、彼女と平塚らいてうの「強姦されて妊娠した子どもを生むかどうか」の激論が衝撃でした。彼女は子どもをいのちはいのちだから生むべきだと言ひ、らいてうは生まなくてもよい、と言つたのです。

当時女というよりは子どもだつた私は、自分がかきだされたくないと思ひ、でも自分がそういうことで妊娠したらどうするんだらう、と揺られて、

学校に提出する読書感想文に書いてはみたものの手にあまり、そのうえなんだか恥ずかしいことを書いてしまったような気がして後悔に襲われたものでした。

で、それきり、このことに関しては時間が止まったままになっていたのです。そして十四年を経て、CHOISIRと出会い、今また考え始めたところですが、CHOISIRの名前の由来が「産む・産まない」ということに関しての「選択」という意味だと知り、残したままにしていた宿題と取り組むときがきたのだなと思つています。

それと、私は耽美は卒業したけれど、当時かかえていた問題、たとえば自分が満足するためにそのファンタジーの対象者を平気で圧迫して、しかもそれに気づかなかつたという点については、そのままだったことがわかり、考えていかなければならない、と思つています。

佐藤さんの「やおいなおんで死んでしまえ」はシヨックでした（私もはじめ谷川さんと同じ誤読をしていて、「死んでほしいんだろなあ」とか思つてしまった。こういうカン違いにはその人がふだん考えていることがあらわれる、といえます。ということは、気に喰わない相手に対して「いつか殺す」とか思つてしまつているんだな、私、コワイな。

今の私は「地震とオウム事件以前のこととは思いつけないわ」状態で、耽美小説に夢中になっていたころのことなんて思い出せないで、つつかれでも反省できなくてごめんさい的になっているのですが、そんなことを言つているとまた違うところで同じことを繰り返す。

耽美していた頃を思い出すと、あまりに圧倒的な力につき動かされて、佐藤さんのような声を知つても、やめられなかつただろうと思ひます。うーん。クリスマスってクリスチャンじゃない人でもお祝いして楽しむでしょう？ デートしてセックスする日だと思つている人も多いし。あと、結婚式は教会でしたいとか。ああいうのって、海千山千の女といわれるカトリックに比して生娘だといわれるプロテスタントのクリスチャンで、敵

しい一神教で占いもご法度の私にはわかんない。嫉妬深い神さまだから、そういうの許してくれないの（占いはだめで耽美はいいのかなんて聞かないでね。自分でもどうしようもなかつたんだから。でもキリスト教つてのは、そうしたエゴによつて罪を犯さずにはいられない人間が神の名によつて許されるためのシステムだから。人に許されず、自分も許せなくても、神さまだけは許してくれるというのがこの宗教の機能のひとつなのよ。

というわけでクリスチャンの私には理解できないんだけど、中古オリーブ少女でアンアンを立ち読みし続けてきた私にはわかる。やっぱりイベントにはいい宗教ですから。

クリスマスに関してはクリスチャンにはキリスト＝ロゴス＝生命を生み出し、育て、老化させ、やがては死と来世での生命にいたらせる力が、その力の源である者自身の慈愛——アガペーにより人の子として、この世界に生まれいでたことを祝う、いのちをことほぎ喜ぶ祭りだけど、アガペーの対極にあるエロスなる愛もまた生命のほとばしりそのものであり、クリスマスにセックスする人もまたいのちを賛歌しているのだか思ひます。

だから、ま、いいじゃないかと思つてきたんです。「クリスチャンならもつと優しいはずだ」と言われたり、蚊をつぶせば「クリスチャンがそんなことしていいの？」と言われたり、仏壇や神社に手を合わせないと「寛容じゃない。クリスチャンはそうではない人をバカにしているだろう」とか言われたり。若いときは「買つてに妄想しやがって」と怒つていましたが、年をくつてくると「勝手に妄想していただく、関係ないです、私」というふうになてきました。

自分のアイデンティティーにない別のものへイマジネーションでかかわるときつて、そういう問題から逃れられない。自分の日常生活では得られない「夢」をそこに投影しているから。

でも、私も許しているんだから、私が夢を投影している対象も許してく

れると無意識に思ってしまったのはいけないことでした。

昨年、CHOISIRの論争を読んで、やおいに走る人たちというのは存外にマン・ヘイティングであったりホモ・フォビアであったりするのだなということがわかりました。マン・ヘイティングの人がレズになって、自分のパートナーをみつけたりしているのを読んで驚きました。

私がレズにならなかったのは(精神的には充分レズだけど。男より女に目が行くし、好みの女の子をみつけるとどうやって仲良くならうか、そればかり考えちゃう)、本来ヘテロであるからだけではなく、私の場合マン・ヘイティングではなく、ヒューマン・ヘイティングであり、ヒューマン・フォビアだからなのだと思います。好きなんだけど、それと同じくらい嫌いだし、恐い。

ではなんで恐いのかというと、ひとつは、やはり社会における性別によるヒエラルキー構造によって、男とは対等でないという恐怖もあるでしょう。

ミヒヤエル・エンテが、この十九〜二十世紀というのは歴史上、女性の地位がいちばん低い時代なのです、と言っていて、えーつ、中世とか古代のほうがそうじゃないの?と思いましたが、経済体制のせいであんなのだと思います。

農耕していた時代は女の人も家庭の経済の担い手であったわけですが、差偉業社会を迎え、男が外で働き女が家事や育児を分担するようになると女は目に見える収入をもたらさなくなる。それがますます性別によるヒエラルキーの差異を生んだのではないのでしょうか。

ヘテロの女の人が女性として尊敬をもって男の人と愛情をつくれるなら、耽美小説なんていらぬのかも、と思いました。

で、私の場合、女なのが嫌だというより、女であることも含めて、人間であうることがきつと嫌で、受け入れられなかったんじゃないかな。風に

なつて大気圏のあたりを何も考えず吹いていたいと思つていました。だからきつと女性へのエロスに向かわず、救いを宗教と自分(女)の介在しないファンタジーに求めたのです。

自力で自分を受け入れられればよかったのだけど、あまりに深いさまざまなコンプレックスのためにそれができなかったし、生身の人間にそれを求めることもできなかった。女とも対等に性的関係を持つてと思つていなかったのかも知れない。

ところで、私の場合、実は恐い理由は性別によるヒエラルキーの差異の他にもいろいろあるんですが、そのなかで、最近考えたことを一つ書きま

す。私はずつと耽美小説を読んでいたけれど、やおいというのは耽美とは違うんじゃないかと思つていたんです。耽美のほうがオリジナルで文学っぽく、やおいのほうはパロティ度が高いんじゃないかなと漠然と思つていました。

同人誌は読まないから、わからなかった(でも「らっぱり」は知つてい

る。波津彬子さんに問い合わせの手紙を出したこともあるし、彼女独特の字で来た返事の封筒は十五年來、大事にしている)。
それで、ニユースなんかで取り上げられているのを見ると「ヤマなし・オチなし・イミなし」という意味だと言っている。「そうか」とずつとそんなものだと思つていたのが、「デビュー」を読んで、やおいがオリジナルもいっぱいあるし、私が耽美と定義してきたものとそう変わらないのではないかと思いました。

けれど最近、耽美といわれようと、やおいと呼ばれようと、あの世界というのには女にとってはすべてパロディなのではないかと思うのです。もちろん、ゲイの恋愛がヘテロのそのパロディだと言つていられるのはありません。女にとって女(自分)のかかわらない恋愛は、女(自分)がかかわ

る恋愛のパロディなんじゃないかな。

ではどうして、ファンタジーさえ、より自分に根差したのではなく、そうしたものを求めるのか？

先日、最近評判の悪い中沢新一の『リアルであること』（メタローグ）を読んだら、こんなことを言っていました。

「パロディというのは、深みをストツプさせる良識の行為です。パロディが出てくると、笑っちゃうでしょう。そこで客観化がおこなわれる。そうすると意識はそれ以上行かなくてもすむんです。

つまり、パロディはラジカルな人間の行為にたいしては安全弁になるんですね。逆にいうと、それ以上行くと危ないよ、という警戒信号にもなる。」

この言葉をやおおいというパロディにあてはめた場合、なにが危ないのか。同じ本の中で彼はこうも言っています。

「普通、ぼくたちは恋人どうしになる場合でも、好きとか嫌いとか、そんな程度の意識交換で、相手のことを所有したり縛ったりという関係に入りますけど、本当は『あなた』はぼくにとつて絶対わからない存在なんじゃないですか。じつは底知れない、わかりようのないものを目の前にしている。だけど、現代の人間関係というのは、そんな底知れないものを相手にしないようにしているんですね。表面的なところでごまかすを交わし、『ぼく』とか『あなた』とか言っているけれど、もしその『あなた』というものの体験を問いつめていいたら、深い恐ろしいところにとどりついてしまうんです。」

これなんです。中沢新一の言う、この「深い恐ろしいところ」が私は恐い。

しかし、人を求める欲望はある。現実には踏みだせずファンタジーに疑似体験を求めながら、そこでさえパロディという安全を求めてしまう。

人と人がかわるとき、同性愛だろうと異性愛だろうと、親子であろうと友人であろうと、ほんとはみんなこの恐ろしいものの問題があります。

でも自分がまったく関係ない関係になら、そうした恐ろしさのないファンタジーを仮託できる。そして、同じ夢を見る人たちがいたなら、いつしよにそれを見ることもできる。

なんて、やおおい同人誌経験のない者が言うところ「そんな甘いもんじゃないよ、同人誌だって」って言われそうだけど、私にとってJUNEは巨大同人誌でしたから。で、まわりに生の言葉を交わす同志がいなかったので（耽美している友人はいるんだけど、彼女はJUNEは読んでいないし、一人で耽美しているのが好きで、彼女にとってその聖域のその世界のことを誰かと話すのはけがれてしまうような気がしているように思えた。それでは自分のことは勝手に話していたけど、彼女は自分の話はしなかったから）、勝手に「傷ついた女の子どうしの甘く優しい苺畑」として妄想できていたんです。そう信じれば、信じているものには、そうしている間は、それが真実だから。

そういうわけでしたが、三十代は、深い恐ろしいものを現実に体験したいと思っっています。

さて、CHOISIRの四十五号を読んで、またいろいろ考えています。うーん。谷川さん問題は人事ではない気がします。私も被害妄想は得意だからなあ。自分のことは棚にあげて「クリスチャンはこーゆーところが困るし問題だよなえ」とかよくやってるし。

心理学に関して栗原さんが言われていたことはほんとにそうだと思うし、だいたい心理学なんてひとからげにできないもので、あれは宗教みたいに醜魅魘魅的にさまざま派があり、そのなかでもさまざま考えがあり、常に流動し、育ち、花咲いて枯れ、新しいものが生まれているものだし。

根本敬が「オウム真理教は麻原彰晃にとつただけ正しい」と書いていましたが『ジ・オウム』太田出版社、谷川さんの言っっていることも彼女に

とってだけ正しい。というか心理学も神学も、本来そういうものだと思えます。河合隼雄先生とミヒヤエル・エンデも対談の中で、ユングの間違いは自分の心理学がすべての人にあてはまると思ってしまったことだ、と言っていました(『三つの鏡』朝日新聞社)。ユングの答えはユングにとっての答えではない。

一生というスパンの中で思索しながらオリジナルの心理学をじっくりつくっていくのは非常な楽しみだし、それが必要な人にとってはかけがえないもの。

で、自力ではじめからそれをつくるのなんて無理だし無茶なので、既製のすぐれたものを知り、考え、応用していくのはいいと思うんです。そして、それが自分の共鳴した大好きな作品を論じるのも。

そもそも、批評とか評論って、なんですかと思いませんか？ 仕事でやっている人は別として一般の人がやるというのは、やはりその作品が好きで、その作品を愛している自分とはなんなのか、どうして好きなのか、それを考えて、誰かに伝えたいんだと思います。私はこんなでこんなふうに生きているんだよ、こんなふうな愛や願いをかかえているんだよ、と言いたいんだと思う。あるいは、こんなのを憎んでいる、嫌っている、怒っているって場合もあるけれど、何にしたって、自分のことが言いたいんじゃないかな。

で、それを言葉にしたとき共感してくれる人もいれば叩く人も出てくるのは当然です。

友人たちと話していて、たまに「それは違うよ」と言われることがあります。たいてい相手はすごい自信をもってそう言うので、もし間違っているのならそれを納得したいし、ただ互いの感覚や考え方が違うのならそれはそれでいいし、できればその人がどういうわけでそう感じるのかを納得したい。

それで「どうしてそう思うのか」と問うと、たいていの女の子が晴れ晴れと明快に「だってそう感じるの！」とくる。「説明してよ」と言っても「説明できないよ、そんなの」と言う。

「私はどうして自分がそう感じるのか、また何を好きで何を嫌いなのかとその理由がわかるし、人に説明できる。だから私の言うことを否定するのなら、あなたも説明してほしい」と言うのと、「普通はね、言えないし、わからないんだよ、どうしてなのか。だって感情の問題でしょう。感情に理由も理屈もないよ」と言われてしまう。

でたつ。伝家の宝刀、「感情に理由はない。ゆえに説明不可能」。村上春樹の『ねじまき鳥のクロニクル』の奥さんもそういう人だったよなあ、困るんだよなあ、そういうの。

私はすべての感情にはちゃんと理由があると思います。

しかし、昨年オウム事件をめぐる文化人の論説を読んできてあららと思ったのは、案外、吉本隆明とか浅田彰なんて人が突然、なんの説明もなく「だってそう感じるの！」をやっちゃってる。誰かを批判するときに、批判している相手の名前も内容も言わずに、ただ自分の快・不快で斬ったりしている。あの人たちは高慢なこと言っているんで、難しさもつもらしさに目がくらんで私は気づかなかったんだけど、小浜逸郎が指摘して批判していた(『オウムと全共闘』草田寛社)。

詩人じゃないんだから、やめてくれよ、そういうの。現代日本の思想家を代表する人がそれじゃあ、市井の女の子がそれでもしょうがないのかな。でもそれじゃ、対話にならない。

なんだか谷川さんに関して、「だってそう感じるの！」で逃げられた気がします。うーん、谷川さんはいろいろ語ってくれてはいるんだけど、じゃあどうしてそう感じるのか、納得できるだけの材料を提示してくれていない。やはりもつと自分をさらけだしてもらわないと、なんだか自分だけにはくるんで守って、自分を不快にさせるものを攻撃しているだけみたい。

せつかく言葉でかわらうとするなら、それはないじゃないですか。もつたないし。あれでは心理学が、何かを理解するのを助けてくれる技術ではなく、自説を支えるために捜し出してきたアイテムという感じがします。

(中略)

先日、ステイブ・ハッサンという人の『マインド・コントロールの恐怖』(恒友出版)という本を読みました。著者はユダヤ人で、十九歳のとき統一協会に入り、二七カ月在籍して幅広い活動をし、アメリカ統一協会の幹部にのぼり、文鮮明とも何度も会いますが、交通事故をきっかけに脱洗脳をうけ、その後ケンブリッジで学び、カルトのマインド・コントロールの犠牲となっている人たちの救出と、破壊的カルトの啓蒙活動を行なっている人です。

この本の中で感動したことのひとつは、彼がカルトから人を救出するにあたり、

「勧誘された本人を援助することに集中しよう。そのためには、情報と方策のふたつがいちばん重要な手段である。全体としての目標はこうでなければならぬ——本人が変わり成長するのを助けるのに必要な条件を作りだすため、あなたにできる範囲内のことなんでもすること。

何をしたり言ったりするべきか決めるときには、家族や友人はいつもこの目標を心にとめておくべきである。私がこの目標に『本人をグループから出す』ということを含めていないことに注意してほしい。意図的にそうしたのである。人々は変わり成長する。その自然の結果として、破壊的カルトから抜け出すのだというのを私は知ったからである。前向きな成長に焦点をおけば、抵抗はより少なく、幸せと効果は増大する」

と言っていること。

破壊的カルトといつしよにしたらいけないかも知れないけれど、耽美をやめたいというのなら、自分のなかのそれを殺すんじゃないかと、成長することによってそれから卒業するというのがいいんじゃないかな。

河合隼雄先生は『このころの処方箋』(新潮社)の中で、徹底的にやりぬいたものからだけ卒業できるのだ、みたいなことを言っています(本が手元ないのでおぼろな記憶だが)。

自分をふりかえると、はじめに耽美にはまった時というのは、罪悪感から「こんなものとは早く手を切らなければ」と思って、惹かれながら嫌って逃げていました。

で一時直りして、三年後、突然病気がぶり返してしまい、そのときは自分でも統御できないほど心のエネルギーが怒濤のようにそちらに向かつてしまい、はまりきらざるを得なかつたんです。

でもそうしていなくなつたら、たぶん今も卒業できなかったと思います。耽美にひかれる自分をいまわしく思い、それでいながら、この快楽を失いたくないとも思い、揺れに揺れながらおぼつかない足取りで、どこが目的地なのかわからないまま歩き続けていました。

そしたらふつとこの永遠の苺畑(目を閉じれば生きるのは楽。何もあくせくすることのない苺畑よ、永遠に。ピートルズの「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」が、私にはあの世界にいたときの気持ちにびつたりくる)から出ていたのだけど、偶然だったのかも知れない。生きている間ずっと狐にとりつかれたようにここをぐるぐるめぐっていても不思議ではなかった。

でもきつと、歩いていこううちに常春の世界にどこか飽きて、もつと広い世界に行きたいなあ、そこが冷たくても寂しくてもいい、とか思って、そがかいま見たその外が、別にそういうところではなくて、現実の人の情けがあつて、けつこういいところだ、と思えたから出られたんじゃないかな、と思つています。

いま私は、自分の現状に正直なまま、いい格好をしようとしたり媚びたり背伸びしたり拗ねたりせず、どんな人とでも接することができるようになりたいと思って努力している。たぶんそうできるようになると、私はすごく楽になるだろうと思うから。でも、それは私にとって、そういうふうにしにくくしているものをはっきり認識して、一つ一つ乗り越えていくことでもあるのだ。

その前段階として、私の場合、緊張していなくて、自分の思いに素直に行動しているときの気持ちよさ、安心感をまず知る、という必要があった。

私は、他人との関係でちょっとつまづくと、すぐ自分を責めたり相手に苦手意識をもったりという一人相談をしがちで、そうやって観念のなかで自分を規制したり防衛したりしてがんじがらめにしてしまう結果、我を忘れてとか理性を失って行動する自分を認められないし許せないという時期が長かった。どんな行動にもすべて理屈（言い訳になっていることも多い）で跡づけをしてしまう。そうやって自分自身をわかっているつもりになっていたし、感情や欲求を防御することで、自分が外界から拒まれないでいられると思っていた。

しかし、頭がする説明が、自分でもまさしく言い訳ばかりになっている感じが次第に強まっていく。考えることとしていることが違う気はするのに、どちらが正しいのか、どうしたら一致させることができるのかかわからず鬱屈し、その不一致を他人から見破られることが怖くて、萎縮したり逆に強がってみせたりする自分も許しがたかった。

それから、長い長い本当の自分（の感情・感覚や欲求）探しの日々が始まる。そして、頭で管理する以前の自分の望みや心地よさの感覚——こういうものが自分にあることすらわからなくなっていた——を認められるようになり、そこに基づいて行動することはちっともいけないうことではないと信じられるように、いまようやくようになってきた。

他人と良い関係をつくりたいという望みが、どこかで学んだ倫理観などとはまったく関わりないところで私のなかに元からあるのだと思えたら、そう

いうものを求めて自分がしてしまうことはなんでも許せるようになり、そうすると、自分のした行動に言い訳を必要としなくなって、ひいては責任がとれるようになった。失敗したら誤ればいい。それが正直つてもんで、きちんと誤れば、自然に誠意というかたちになるはずだ、と。それが相手にうまく伝わらずにこじれたら、さらに関係を立て直す努力をするか不毛そうなのでやめるかは、相手のあり方を見て、その都度、好きに決めればいい。とにかく自分自身に嘘がない限り、自分を信じられなくなったり否定したくなったりはしないのだというのが、私の場合の法則のようである。

で、そこまでわかるようになってきても、乗り越えるべきハードル（自分がいままで現実から目を逸らす言い訳がわりに頼ってきた社会通念に基づく固定観念）は次から次へと見つかる。そんなものを認識しない無邪気な人間であったらどんなに楽かとは思うけれど、さしあたり私は頭で分析してしまうタイプの人間なので、自分のなかにある固定観念がハードルに見えてしまうのである。そうやって意識化しないと、自分が何を怖がっていてどうしたらそれを解決できるのかがわからなくなってしまう。つまり、そのハードルを一つ一つ乗り越えられたと納得しないことには幸せにはなれない、手間のかかる質なのだ。

*

最近ぶつかったハードルは、同性愛に関わるもの。

私は五年前、つきあっていた男性に「やっぱり僕は女の人にはダメみたいだ」と言われて、ふられた体験がある。当初から彼は、「僕はバイセクシュアルかもしれない」という言い方で、男にも魅かれることを、私に打ち明けてはいた。そのとき私は、そういうふうに語った彼の心境を深く考えないで、「いま私のことを一番好きと思っていてくれるのなら、それでいい」と答えたのだ。彼自身が当時、自分のセクシュアリティをはっきり自認できていなかっただけで、彼は誠実であったし、私の同性愛への無理解にも非があった、といまは思っている。でもふられた時点では、どうして私じゃダメなのか、女ともセックスできるのに、なぜあえて男がいいと言うんだらうか、と悩んだ。それから初めて私は同性愛に関する本を良品だし、『CHOISIR』にも出会い、さまざまなセクシュアリティのあることを認められるようになった。そして、恋愛が終っても、彼のこと、彼との友人関係は大切にしたいと思ってきた。

彼は、自分が「この人は」と思った人にだけしか自分のセクシュアリティを告げない。そうでない人がいる場では、ヘテロ男として扱われることに異議を唱えない。また、彼は自分のことをペラペラしゃべるタイプではなく、彼のセクシュアリティを知っている人ばかりのときでも、自分の恋愛の話なんかはまずしない。だからこちらも根掘り葉掘り訊きにくいし、そういう彼のやり方を尊重してあげたいと思うあまり、私や彼の友人は彼のセクシュアリティを表だって話題にすることを避けてきた。少なくとも私は彼をヘテロ扱いはしないけれど、ゲイである彼自身をあたりまえのこととして会話をするというのもできなかった。

そんな頃、私の大好きな宮沢和史（THE BOOM）のエッセイ集を読んでいて、そのなかの、仲間うちで時々、自分がホモであるということにし

M

て会話してみると、いろんな発見があつておもしろい、という話に衝撃を受けた。どうしたらそんなことができるのだろうと、わが身を振り返って途方に暮れたのだ。

私の友人の多くが私とつきあっていた彼を知っていたので、自分が選んだ人以外にはゲイだと知られたくないという彼の意思を思い、私は友人たちにいつも一点偽って彼のことを語ってきた。彼に未練のあるうちは、それもどうということはないけれど、すっかり気持ちの整理がついて、良い友人の一人になったとき、愛すべき友人と自分のありのままを語れないでいる自分に不自然さを感じ出した。私は私の友人たちにも同性愛者の存在を認め、それぞれのなかにある差別意識や偏見をなくしてほしいと思っているのに、私がそのことを考えるようになったきっかけを正直に話すことができない――。

私が自分の体験を友人に語れないその根底には、彼にふられて混乱していたとき、人に相談したくて（私は別れたくなかったので）何回か一生懸命説明しようとしたのに、まともにとりあってもらえなかったという経験があった。彼を変態のように思われたり、自分の大切な恋愛体験が好奇の目で見られる――そこまでひどくなくても、別世界の特殊な出来事扱いされる――という周囲の反応に、私自身がすっかり不信感を抱いてしまったのだ。

当時、私は女性史を研究する市民グループにいた。五、六年前という時代のせいもあるのだろうが、フェミニズムにも少なからず関心のあったそのメンバーの間でも、恋人・夫の話題やセックスの話題は、冷やかしか響壁の対象にされがちで、私の混乱と苦悩はとうてい理解してもらえそうにはなかった。こういう経験が、彼の心理と同じところに私を置いてしまったのだ。

でも、このクロゼット状態は辛い。それをはっきり自覚したのは、昨年、映画『プリシラ』を見たとき。あの最後のほうに出てくるゲイの主人公の同居している妻（女だよ）の態度に、私ははっきり羨ましさを感じた。赤ん坊のときに別れ父親をほとんど知らない息子に、ドラッグ・ショーのショー・ガールをしていて、ゲイとアイデンティファイしている父親のことを包み隠

さず教えて育て、その子はなんの屈折もなく、ありのままの彼を父親として受け入れることができている。もちろん彼女自身も、自分の現状の屈折まくっていることに憂鬱になる反面、私もそうなりたいと痛切に思った。

そして今年に入ってから。習いに行っていた英会話のクラスで、たまたま同性愛者の話題が出、講師（オーストラリア人の先生）が四人の生徒一人一人に「同性愛者を知っているか」「彼らのことをどう思うか」と質問した。そのとき私は「知っている」と答えたものの、つきあっていた彼のことは言わずに、自分の会社が新宿二丁目にあるので日常的によく見かける、という話をした。「どうしてそこにいる人が同性愛者だとわかるのか」と尋ねられ、「女言葉を使う男性やいわゆるスキンヘッドの人だから」というものすごく偏見に満ちた発言をし、いくら英語が下手でゆっくり考えてしゃべれないとは言え、口から出たものが本心とあまりにずれていて自己嫌悪した。しかもむその直後、その講師は自分がゲイであると私たちの前でカミングアウトしたのだ。そして少しはにかみつつも、ほんとうに誇らしそうに、そのことをproudしていると言ったのである。その瞬間、私は彼の表情や言い方すべてに感動していた。

自分がこうやって、つきあっていた彼になんの被害を及ぼさない場面さえ、周囲の人間はまず同性愛者を変態のように見るヘテロかもしれないと考えてしまい、彼らから眉をひそめられないようにふるまってきたこと、それは、同性愛を認めないヘテロ社会が私の体験や私自身をも認められないように思え、怖かったからだということが、そのときははっきりわかった。でも、この状態のままじゃ自分は差別に加担こそすれ、とても同性愛者の自由に生きる権利を支持しているなんて言えたもんじゃないと、どこかでわかっていて、居心地が悪かったということも。

同性愛者ではない私が、自分の同性愛者との体験をオープンにしたって、なんの被害があるわけではない。もちろん彼の気持ちは尊重し、私のせいで彼に被害がおよぶ事態を避ける配慮は怠らないにしても、それはそれ、これはこれ。「変な人」や「オコゲ」と見られたくないという自分自身の弱さを、すべて彼のせいにしてきたのではないか、とようやく気づいたのだ。「同性愛者はたくさんいる」とか「同性愛は単なるセクシュアリティのひとつでしかない」と頭ではわかっているつもりでも行動が伴わなかったのは、私自身が「同性愛は異常」という社会通念に縛られていたということでもある。

私は英会話の講師に、次の週、拙い英語で自分の体験を、それが語れなかったことも含めて、正直に話した。彼が、それをただふつうに聞いてくれた（しかも「話してくれてthank you」と言ってくれた♥）初めての人になった。素直になると自分が楽になる、とそのとき実感した。

*

自分を認めてくれない社会を怖がって、自らそれを支えてしまうようなことをしては、不毛だよな。本来、私がどんな人間であってもそのまま認めてくれる状況があるべきで、そういう状況になっていなかったら周囲のほうへ文句を言うのがスジってものだ。周囲の友達が変わってほしいと思うなら、多少の失望くらいでメゲてはいられない。自分の友達や身近な人間くらい信じてみようということも、このごろは考えている。

■突然の閉刊決定となってしまうました。今まで本当にありがとうございました。というわけで、次号は「CHOISIRと私」という内容で原稿募集させていただきます。

■優生保護法から優生思想が削除され、名称が変更されるとのニュース、ご存じの方も多いことと思いますが、なんだかとってもヤバそうです。優生思想の削除はもちろん歓迎すべきことなのですが、女性にとっては今後、チョベリバーな方向に進められてしまう危険性大なのです（名称は「母体保護法」になるとの話を聞きました）。次号で詳しいことを報告できたら、と思っています。今後の動向に要注意。

■次号の締切は7月15日です（今号が遅れた関係で、あんまり時間がなくてゴメンナイ）。

お手紙をくださる方は、掲載していいかどうかの旨を明記の上、掲載していい場合のお名前もお忘れなく。よろしく願いいたします。

■投稿してくださる方は、MS-DOS変換済みの2DDフロッピーを（打ち出しも添付して）お送りくださると助かります。

●CHOISIRは、生き方とセクシュアリティを考える（主に）女性のためのミニコミです。

中絶可能時期短縮問題に反対する動きのなかで創刊したため、（産む・産まないの）「選択」を意味するフランス語を誌名にしています。現在は、女性をとりまくあらゆる問題をとりあげ、各人の決定権と「選択」の自由を考えています。

CHOISIR Vol.46

発行年月 96. June

編集発行

年間購読代 3000円（送料含・年6回発行）

1部=300円

郵便振替 （名義：ショワジュール）

■無断転載・複製 お断り■